様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０２４０５

研究課題名（和文）幼児期の自己信頼性と手指操作及び認知・言語機能の発達連関をとらえた保育・療育

研究課題名（英文）Education based on Developmental Relationships among Self-Reliance, Manipulation and Cognitive-Verbal Functions in Early Childhood

研究代表者
田中　真介（TANAKA, Shinsuke）

京都大学・国際高等教育院・准教授

研究者番号：６０２０１６２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　幼児期から思春期の発達過程で、自他を価値づける自己信頼性の発達がその後の総合的な発達を推進する原動力となる。発達的な障害の生成の基本機構として、脳機能の局所的な問題とは異なるマクロな発達連関の機構に焦点をあてた。

3～6歳の幼児、8～15歳の小中学生で横断研究と縦断観察を行い、握り圧計で手指の微細な把握圧の変動を分析し、課題に応じた自発的な行動制御の特徴をもとに自己信頼性と手指操作及び認知・言語機能の発達連関の過程を明らかにした。さらに小中学校で「自己理解アンケート」と「健康アンケート」を実施し、児童期・思春期での自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた新たな指導・援助の方法を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
幼児期・児童期・青年期の発達過程で、自己信頼性の生成発展が、全身運動、手指操作、認知・言語などの個別機能の形成を進める原動力となることが明らかとなった。自己信頼性と社会的交流性の関連を考慮した新たな保育・教育・療育によって発達の基盤が整えられ、発達的な障害に特有の症状や行動が改善された。
さらに、小・中学校及び特別支援学校で、自己信頼性と社会的交流性の発達を支える新たな指導・援助を工夫した教育方法を構想し実践した。
本研究の成果は、幼児期・児童期・青年期の保育・教育・療育のカリキュラム、具体的な教育指導、及び社会的な保育・教育制度を新たにしていくための理論的・実践的な基礎となる。

研究成果の概要（英文）：Human infants and children try to relate to others and establish social relationships (Social inter-activities). Through such activities, each of us seeks to affirm ourselves and others in two ways.
I objectify my individuality and its specific character. Then, when you enjoy the world that I have created by through my social activities, I have satisfied my human desires, and have objectified our essential nature, our "Self-Reliance". In this way, I have served as a mediator between you and the whole of humanity. Therefore, I have become part of the completion of your own essential nature and a necessary part of yourself. You, your hands, and your words are a concentrated expression of the past history and future possibility of humankind, and can open the door to our new world and become an important aid for all people.
We clarified developmental relationships among Self-Reliance, Social inter-activities and various functions to create new methods of education in early childhood.

研究分野：発達論・発達診断学・神経科学・障害療育学

キーワード：幼児期・児童期・青年期の発達　自己信頼性　社会的交流性　保育・療育　認知・言語機能　手指操作機能　新型コロナウイルス感染症　自閉症

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

幼児期から児童期・青年期の発達過程で、個別の認知・言語的な機能が形成されているにも関わらず、「自己信頼性」（自分自身の価値を発見し尊重する力）、また「社会的交流性」（自分とまわりの世界とのつながりをつくり相互を尊重する力）の発達が阻害されている場合に、その後の総合的な発達が抑制される事例が少なくない。特に幼少期に自己信頼性の啓培をもとにした自我の拡大と充実が制約されることによって、個別の諸機能と自我・自己信頼性の発達とが乖離し、それが発達全体の揺らぎや遅滞をもたらしている可能性がある。

本研究では、新型コロナウイルス感染症の影響のために、保育・教育の関連機関での実験・調査が容易でない状況が続いた。そのため 2021 年度には、個別事例の実験・観察資料をもとに、自己信頼性の発達過程を解明する基礎研究を行った。2022 年度と 2023 年度には、各保育・療育機関や小・中学校、及び特別支援学校の協力を得て横断的・縦断的な実験・調査を実施し、幼児期・児童期・青年前期の自己信頼性の発達過程をとらえた。また、発達に揺らぎや遅れのある事例の分析を行い、自己信頼性と社会的交流性の形成水準や両者の連関過程にどのような制約があるかを検討した。

…

２．研究の目的

本研究では、発達的な障害生成の基本機構として、脳機能の局所的な問題とは異なるマクロな発達連関の機構に焦点をあて、自己信頼性が、子どもたちの社会的交流性を媒介として、手指操作や認知・言語機能などの発達の個別的な諸機能とどのように連関しあっているかを解明する。

また、通常の児童と障害のある児童の発達の特質を比較して、自己信頼性の生成発展の制約が発達全体に与える影響を明らかにし、自己信頼性と社会的交流性の発達連関をとらえた新たな保育・教育・療育の方法を提起する。

…

３．研究の方法

●研究１：幼児期・児童期の発達と保育・療育

自己信頼性の水準と特質及び発達経過を客観的に測定・評価するために、手指操作での微細な把握圧の制御による応答に着目し、握り圧の微細変動と手指操作の活動を同時記録できる「握り圧計」を開発し活用した。この装置で手指操作の把握圧の波形データの解析を行うとともに、波形データと手指操作活動の場面の映像データを同時記録し、課題に応じた行動制御の過程を綿密に評価した。また、自己信頼性の発達の特徴を各種の描画課題で定性的・定量的にとらえ、認知・言語機能を新版Ｋ式発達検査の関連項目で評価した。それをもとに、幼児期・児童期の手指操作及び認知・言語機能と自己信頼性の発達的な連関の過程を考察した。

自己信頼性の発達過程の解明をもとに、保育園及び小・中学校での参与観察による実践的な研究を行い、どのような教育的・臨床的な援助が自己信頼性の発達を支えるかを具体的に検討した。自己信頼性の属性として、①時間・形成面、②空間・社会面、③価値面それぞれの特質に焦点をあてて、自己信頼性と社会的交流性及び個別の認知・言語的な諸機能の関連を分析し、保育・教育の具体的な方法を工夫してアプローチを試み、新たな発達的援助の観点を提起した。

また、幼児 56 名（男児 37 名、女児 19 名、3 歳 8 か月～6 歳 7 か月）を対象として、手指の把握圧の変動を「握り圧計」で測定した。両手交互開閉の課題を、①モデルあり 1 秒切り換え、②モデルあり 2 秒切り換え、③モデルなしの３つの条件で実施し、手指操作に現れる自己信頼性の発達過程を考察した。さらに、幼児期の手指操作と自己認識の発達的な関連性について検討するために、56 名の幼児に、自画像の描画課題を実施し、グッドイナフ人物画知能検査の採点基準で自画像得点を算出した。特に発達に援助を必要としている幼児については「三方向画」と「成長画」をあわせて実施し、自己認識の発達の水準と特質を評価した。

●研究２：障害のある子どもたちの発達と保育・療育

児童期・思春期を見通した幼児期の発達支援の内容と方法を考えるために、小・中学校の児童・生徒を研究対象に加えて学校訪問を行い、縦断研究を実施した。各学校の協力を得て、自己信頼性の発達についての研究成果に基づいた新たな援助・指導方法を実験的に教育カリキュラムに導入し、各学年での教育方法に取り入れた教育実践研究を実施した。

また、特別支援学校（幼稚部・小学部）での研究を新たに加えた。自己信頼性の発達的意義の理解を深めるために、発達的な障害のある幼児・児童を受け入れている小・中学校及び特別支援学校の協力を得て、継続的に授業参観と参与観察、および自己信頼性カリキュラムを立案して教育実践を行った。この教育実践研究から、自己信頼性に焦点をあてた療育実践を通して自閉症スペクトラム特有の行動が改善されるかどうかを実践的に確かめた。

Ｋ特別支援学校に在籍する自閉症児 3 名、A 児（生活年齢 CA 3:1、発達年齢 DA 1:7）、B 児（CA 6:8、DA 1:9）、C 児（CA 11:1、DA 5:8）を対象として、自己信頼性に焦点をあてた教育方法を検討し実践研究を行ってきた。１年間の実践記録をもとに発達過程を分析した。自己信

頼性の発達水準が異なる3名への実践内容を相互に比較し、どのような教育方法が自己信頼性の生成と充実を支えたかを検討した。A児とC児には新版K式発達検査、B児には自閉症児・発達障害児教育診断検査（PEP-3）を実施した。

●研究３：児童期・思春期の発達と教育・療育

幼児期に自己信頼性を大切にした保育・療育が、その後の児童期・思春期の発達にどのようにつながっていくかをとらえるために、公立の小・中学校の児童・生徒を対象として、自己信頼性と社会的交流性の発達､及び精神的な健康度をとらえるアンケート調査を行った｡小学生169名、中学生117名の計286名を対象として､｢健康アンケート｣(一般健康調査；GHQ-12）と独自に準備した｢自己理解アンケート｣を実施し､自己理解の特徴と精神的な健康度の関連性を検討した。

（１）研究対象

小学生643名、中学生513名、合計1156名にアンケート調査を実施した。小学生444名。中学生214名の計658名から返信があり、このうち小学生213名（3年59名、4年44名、5年54名、6年54名,特別支援学級15名)、中学生134名（1年38名、2年72名、3年24名）合計347名の保護者同意と本人同意を得た。健康アンケート、また自己理解アンケートの中の「20答法」及び「3つの願い」の3項目に回答のあった小学3～6年の児童169名（3年49名、4年35名、5年47名、6年38名）及び中学1～3年生117名（1年34名、2年60名、3年23名）計286名を分析対象とした。

（２）調査の内容・方法

①健康アンケート：日本版一般健康調査12項目版（GHQ-12）を用いて精神的健康度を評価した。小・中学生を対象とした初めての精神的健康度の調査の試みとなった。アンケート用紙は小学生用と中学生用を分けて準備した。また、本研究では新たに「健康度指数」という概念を導入し、健康度の水準を標準化した。この操作によってGHQ得点（応用リッカート法）の各学年の平均得点を、従来のGHQ法やリッカート採点法による平均得点と相互に比較できるようにした。

②自己理解アンケート：①自己紹介（20答法)、②三つの願い、③自由質問（自分自身の時間的変化と社会的関係を自分の言葉で自由記述させる 6 つの質問)。20 答法では、記述の「項目数」、及び「キーワード」をもとにKH coderによるテキストマイニング分析を行い、また「ポジティブ性・ネガティブ性」、「外面性・内面性」、「自己信頼性・社会的交流性」の各カテゴリーで回答内容を類型化して分析した。さらに「3つの願い」と自由質問（幼児期の思い出、成長の実感、この学年での印象、将来像、好きな歌、アンケートへの感想）の記述内容を補完して自己理解の特徴をとらえた。

…

４．研究成果

●研究１：幼児期の発達と保育・療育

モデルに合わせた両手交互開閉操作は、4歳から6歳にかけて漸進的に獲得された。モデルを見ずに行う開閉操作は、5歳後半以後に左右の把握圧の相関度（切り換え操作の正確性）が高まり、自律的な交互開閉が確立されることがわかった。

月齢を統制した相関分析で交互開閉と自画像得点の関連を検討した結果、男女で違いがあり、男児ではモデルを見ずに行う両手交互開閉操作と自画像描画の得点に有意な相関があった。自己認識を深めていくには、提示されたモデルに受動的に合わせるのでなく、自発的・能動的・主体的な活動を保障する保育・療育の重要となろう。

3歳から4歳で、交互開閉の「モデルあり1秒切り換え」の操作が円滑になされるようになった。5歳から6歳に「モデルあり2秒切り換え」の操作力が高まり、モデルなしで自律的に自分のリズムで交互開閉を行う力量が飛躍した。自己信頼性の形成を基礎として客観的な自己認識が生成発展し、手指操作や認知・言語的な個別諸機能の発達が実現していくと推察される。

3歳児で交互開閉が困難だった対象児について事例検討を行った。養育者がその子の手を下で支えるなど、保育・療育の場面での系統的な援助の工夫によって交互開閉の力の芽生えを導き、自励心・自制心の啓培を促すことができた。発達テストの課題に未応答でもそれは必ずしも当該の機能が未形成であることを意味しない。新たな援助の方法が発見されることによって、力の芽生えを確認し育てることが可能と考えることができよう。

●研究２：障害のある子どもたちの発達と保育・療育

（事例１）A児（指導期間：2016年4月～2017年3月、CA 3:1～4:1 幼稚部）

①目標：気持ちを自分の言葉で表現できず、物を壊したり、人を叩いて自己表現し、他者との関係性の構築が困難だった。**「自我の誕生期」**で自分や対象の価値を実感する力への援助を求めているとみて、大人とともに過ごす心地よさや楽しさを味わえるよう配慮した。

②経過：A児が相手を嫌がらずに受け入れる距離から見守り、物を壊す場面でもその行為を受けとめて、「いっぱい叩いたね」等と意味づけて共感的に関わった。遊び場面でA児の発語や笑顔を模倣し、自分の気持ちを鏡に映すようにして理解できるよう援助した（枠付けミラーリング)。家庭訪問を行って母親の苦悩と願いを聴き取り、A児の育ちや関わり方を受けとめた。

③成果：A 児は身近な教師へ微笑みかけ、玩具を手渡し、教師や母親に抱きつくようになった。身近な教師の言葉をまねて様々な声を出し、見立て遊びを楽しむなど、人や物との関わりや自己表現ができ始め、物を壊すことは少なくなっていった。

（事例２）B 児（指導期間：2018 年 4 月～2019 年 3 月、CA 6:8～7:8、小学部１年）

①目標：アニメ登場人物の動きや台詞の再現が好きでよく遊べていたが、働きかけられると「いやなの！」と大声を出し、物を投げるなど強い拒否を表現することが多かった。**「自我・自己信頼性の拡大期」**で自分の力を実感した発揮に援助が必要とみて、相手に合わせてもらう心地よさ、人や物との交流を通して、持てる力を密度高く柔軟に発揮できるよう援助した。

②経過：B 児を笑顔で受けとめ、追いかけっこや絵本の読み聞かせなど本児が好きな遊びで関わるように心掛けた。また健康診断などの新奇な場面でも、活動内容を理解して意欲的に参加できるように事前に実演する映像を見せて、リハーサルを遊びとして楽しむことを試みた。

③成果：「もう一回」と遊びの継続を要望し、自ら新しい活動に取り組もうとする。好きな歌やリズム、絵本など「社会的価値」のある教材を媒介とした交流によって拒否の表現は減っていき、友達や教師とリズムに合わせて楽器を鳴らすなど、多彩な自己表現が可能になった。

（事例３）C 児（指導期間：2019 年 4 月～2020 年 3 月、CA 11:1～12:1、小学部６年）

①目標：自分の嫌なことや思い・願いを率直に表現できず、給食が苦手になったり、自分の体を叩いたりして、いら立ちや気持ちの揺れを表していた。**「自励心・自制心の形成期」**にあって多彩な視点で自己を認識し、自分を励ます力への援助が必要とみて、周囲とのやり取りを通して多彩な価値観や表現に触れ、気持ちを自由に表現できる教育内容を準備した。

②経過：教師自身の嫌なことを C 児に率直に語ることで、徐々に「先生、～が嫌い」と言って微笑むようになった。教師や C 児の嫌なことを歌詞にした「嫌いの歌」で自分のネガティブな感情を率直に表現し、気持ちを受けとめられることを実感する指導を試みた。

③成果：「給食、嫌いだ」と「嫌いの歌」を歌うことで、気持ちを整え、穏やかに食事をしたり、「疲れたから保健室で休みたい」と気持ちを伝えて休息したりするなど、自励心・自制心が育ち、多彩な自己表現ができ始めた。

（４）総合考察：自我・自己信頼性の発達段階を捉えた教育を通して、人・物との関わりや自己表現が豊かになり、破壊や拒否などのネガティブな行動は減少した。

①臨床的援助の観点：子どもの言語表現や表情、行為を模倣して共感的に関わった。子どもたちが自分の行為の意味と価値を実感することによって自我を誕生・回復させ、自ら自己信頼性を育てることができ始めた。

また保護者の思いを受けとめ、生活実態に合わせて子育てを援助した。自分の悩みや弱さ、孤独さなど内面を語ることで保護者自身の自己信頼性が高まり、援助を求める力が育まれた。

②発達的援助の観点：自我の誕生期（DA10 か月～2 歳）では、自分を発見し、人や物とのつながりの中で柔軟に自己や対象を理解していく。援助者が子どもの行為を意味づけて気持ちを共感的に受けとめることで、子どもたちは対象の価値を実感して遊びを多彩に展開し始めた。

自我の拡大期（DA1 歳半ば～3 歳代）には、自分の力を様々な場で発揮し、自分や対象を尊重する力が育まれる。絵本や音楽など、社会的な価値を大人と共有して世界を拡げる援助が重要となろう。

自励心・自制心の形成期（DA3 歳～5 歳代）では、社会的評価と自分の価値観の間で葛藤し、自身の価値を再発見し自分の変化を見つめる自己が育つ。相手の内面を知り、多様な価値観に触れ、気持ちの表現を受けとめられて多面的な自己を実感し、新たな自己信頼性が育まれる。

●研究３：児童期・思春期の発達と教育・療育

小・中学生全体として、健康度が高いほど、自己理解アンケートの 20 答法ではポジティブな記述が多かった。小学５年生（女子）と中学 2～3 年生（女子）で健康度がとくに低い事例がみられた。健康度が高くても自己理解（20 答法）で「前向きな自己理解の度合い（ポジティブ度）」が低い事例や、ポジティブ度が高くても健康度が低い事例を分析し、教育的な援助の課題を考察した。思春期の発達過程では、「自己信頼性」（自分自身の価値を発見し尊重する力）と「社会的交流性」(自分とまわりの世界とのつながりをつくり尊重する力)が連関して人格形成を支える。

（１）精神的健康度

①健康度指数による相互比較：健康度を示す GHQ 得点を新たな方法で配点・採点し、精神的な健康度を評価した（応用リッカート法）。また、各学年の平均得点を従来の採点法による平均得点と比較するために「健康度指数」の概念を導入し、健康度の水準を標準化した。

応用リッカート法では、対象者の健康度を-24 点から+24 点のあいだの得点で評価し、得点幅の最大値（絶対値）は 48 点となる。例えば小学 3 年生（小 3）の平均値は「+12.3 点」だったので、マイナス側の-24 点の絶対値（｜-24｜）の 24+12.3＝36.3 点が健康度の実質的な素点となる。健康度得点の最大値 48 点に対する素点（36.3 点）の割合を「健康度指数」とした。小 3 の健康度指数は 0.75（健康度得点の満点 48 点中の 75%）と算出できる。健康度の採点方法が異なっていても、各採点法での満点に対する「健康度得点の素点」を 100%換算での「得点率」

として表すことで、健康度を相互に比較検討することが可能となった。
（例）小 3 の健康度の従来の「リッカート法」での平均得点値は 9.35 点だった。健康度得点の最大幅は 0～36 点で、リッカート法では得点が高いほど不健康を示すので、健康度は、満点の 36 点から素点（9.35 点）を差し引いた値（36－9.35=26.65）である。この「26.65 点」は、リッカート法での健康度評価の得点幅「36 点」の 74%にあたり、健康度指数は 0.74 と算定できる。この「健康度指数」は本研究で算出した健康度の水準と一致していた。

②精神的健康度の学年比較：精神的健康度の得点は個人差が大きかったが、学年ごとの平均値では、小学 3 年生（小 3）で健康度が高く、小 5 で低い傾向にあった。小 6 では回復したが、中学生は小学生よりも全体として低かった。また中 1 に低下し、中 2 ではやや回復傾向を得たのち、中 3 では中 1 よりもさらに低い健康度を示した。自己信頼性を支える援助が必要であろう。

（２）自己理解

①20 答法：ポジティブな記述例では「好き」「得意」「楽しい」「よくほめられる」「明るい」「友だちが多い」など。ネガティブな記述例としては、「～がきらい」「～が苦手」「身長が低い」「めんどくさがり屋」「勉強が苦手」「頭が悪い」「あきっぽい」などの回答がみられた。

小・中学生とも全体的にポジティブな記述が多かった。学年では、小学生ではポジティブ回答率が高く、小 5 女子と中学生では低い傾向にあった。健康度が低い児童・生徒では、20 答法でネガティブな自己理解の記述が多かった。自己理解と健康度との関連が示唆される。

②３つの願い：年齢とともに、自分の外面を客観的にとらえ、内面を深く理解した記述が増えていった。また、身近な家族や友人との関係性に関する願いを表現し、友だちや家族を思っての願いが増えた。「願う理由」に思春期の内面理解の鍵が表現されていた。

（３）総合考察

特に健康度が低かった小学 5 年と中学 1～3 年の女子のうち、小 5 の事例では、３つの願いで「化粧品」「旅行」「ばくがいしたい」といった記述から、自分に自信がなく、物を買うなど外的な報酬によって自己信頼性を支えようとしていることがわかる。一方で、家庭や家族、友人関係をよくしたい、新しい世界へ行きたいといった願いも共通していた。

中 1～2 女子では、「また今のクラスメイトがいい」「先輩と仲良くなりたい」「しゃべるのがうまくなりたい」など自分の居場所を求め、力や才能がほしいという願い、また関係構築してきた人に自分の思いや意見を伝え、もっと自分をわかってほしいという願いが表現されている。中 3 女子の願いは多彩だったが、進路の実現、憧れの人との出会い、好きな人との結婚、家族の健康、自信を持ちたい思いが共通していた。思春期の心の健康を支えるためには、自己信頼性と社会的交流性をあらためて尊重した新たな発達援助が必要であろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 横井川美佳、田中真介	４．巻 37号
２．論文標題 幼児期における両手交互開閉操作と実行機能および自己認識の発達連関	５．発行年 2024年
３．雑誌名 人間発達研究所紀要	６．最初と最後の頁 pp.13-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中真介	４．巻 62回
２．論文標題 児童期・思春期の発達と健康　～自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた健康教育～	５．発行年 2024年
３．雑誌名 健康権確立に向けて	６．最初と最後の頁 pp.80-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中真介	４．巻 193号
２．論文標題 子どもたちの発達と健康　～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか（その２）～	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼年教育	６．最初と最後の頁 pp.65-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中真介	４．巻 192号
２．論文標題 子どもたちの発達と健康　～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか（その１）～	５．発行年 2023年
３．雑誌名 幼年教育	６．最初と最後の頁 pp.25-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中真介、山本英彦、古賀真子、戸松太一、横井川美佳、本原琴美	4．巻 第89回大会発表論文集
2．論文標題 コロナ禍での子どもたちの発達と健康　～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）発表論文集（自主企画ワークショップ）	6．最初と最後の頁 p.7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 塚田直也、飯島杏那、福田睦、田中真介	4．巻 第89回大会発表論文集
2．論文標題 自己信頼性の育ちを尊重した発達診断・障害児教育　～発達研究と自閉症児教育を通した考察～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）発表論文集（自主企画ワークショップ）	6．最初と最後の頁 p.13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 本原琴美、田中真介	4．巻 第89回大会発表論文集
2．論文標題 思春期における精神的健康度と自己理解の関連性　～20答法と3つの願いのカテゴリー分析をもとに～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横井川美佳、田中真介	4．巻 第89回大会発表論文集
2．論文標題 子育てにおける保護者のポジティブな経験の重要性　～発達支援を利用する保護者へのアンケート調査をもとに～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中真介、塚田直也、横井川美佳、本原琴美	4．巻 第88回大会発表論文集
2．論文標題 幼児期・児童期・青年期の自己信頼性の発達診断と保育・療育	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中真介、横井川美佳、本原琴美	4．巻 第88回大会発表論文集
2．論文標題 自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた保育・療育　～自画像描画と対図形画の事例検討をもとに～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 塚田直也、田中真介	4．巻 第88回大会発表論文集
2．論文標題 自己信頼性の育ちを大切にした教育の意義と可能性　～幼児期・児童期の自閉症の子どもたちへの実践を通して～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 本原琴美、田中真介	4．巻 第88回大会論文集
2．論文標題 思春期における「自己信頼性」と「社会的交流性」の発達連関　～自己理解と精神健康度の関連性をもとに～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横井川美佳、田中真介	4．巻 第88回大会発表論文集
2．論文標題 発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性　～保育施設・療育施設へのアンケート調査をもとに～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）発表論文集	6．最初と最後の頁 p.1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横井川美佳、田中真介	4．巻 第36号
2．論文標題 幼児期における両手交互開閉操作の発達　～握り圧計を用いた定量的分析方法の検討～	5．発行年 2023年
3．雑誌名 人間発達研究所紀要	6．最初と最後の頁 pp.17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 横井川美佳、田中真介	4．巻 48-2
2．論文標題 幼児期における両手交互開閉操作と自己認識の関連性　－モデル提示の意義と男女差に着目して－	5．発行年 2022年
3．雑誌名 応用心理学研究	6．最初と最後の頁 pp.116-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中真介	4．巻 図書所収の論文
2．論文標題 発達と応用心理学（総説）発達研究の意義と特質　～自我・自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた保育・教育～	5．発行年 2022年
3．雑誌名 応用心理学ハンドブック（第5章）発達と応用心理学	6．最初と最後の頁 pp.210-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 横井川美佳、田中真介
2．発表標題 コロナ禍における幼児の自画像描画の変化　～グッドイナフ人物画知能検査得点と鼻・耳の有無をもとに～
3．学会等名 日本発達心理学会第35回大会（2024年3月）ポスター発表
4．発表年 2024年

1．発表者名 田中真介、山本英彦、古賀真子、戸松太一、横井川美佳、本原琴美
2．発表標題 コロナ禍での子どもたちの発達と健康　～大切な人の笑顔を見ずに子どもは育つか～
3．学会等名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）自主企画ワークショップ
4．発表年 2023年

1．発表者名 塚田直也、飯島杏那、福田睦、田中真介
2．発表標題 自己信頼性の育ちを尊重した発達診断・障害児教育　～発達研究と自閉症児教育を通した考察～
3．学会等名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）自主企画ワークショップ
4．発表年 2023年

1．発表者名 本原琴美、田中真介
2．発表標題 思春期における精神的健康度と自己理解の関連性　～20答法と3つの願いのカテゴリー分析をもとに～
3．学会等名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）ポスター発表
4．発表年 2023年

１．発表者名 横井川美佳、田中真介
２．発表標題 子育てにおける保護者のポジティブな経験の重要性　～発達支援を利用する保護者へのアンケート調査をもとに～
３．学会等名 日本応用心理学会第89回大会（2023年8月）ポスター発表
４．発表年 2023年

１．発表者名 横井川美佳、田中真介
２．発表標題 幼児期の発達における自己認識の重要性　～保育群と支援群の自画像描画の比較をもとに～
３．学会等名 日本発達心理学会第34回大会（2023年3月）ポスター発表
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 田中真介、塚田直也、横井川美佳、本原琴美
２．発表標題 幼児期・児童期・青年期の自己信頼性の発達診断と保育・療育
３．学会等名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）自主企画研究発表
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 塚田直也、田中真介
２．発表標題 自己信頼性の育ちを大切にした教育の意義と可能性　～幼児期・児童期の自閉症の子どもたちへの実践を通して～
３．学会等名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）一般発表
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 横井川美佳、田中真介
２．発表標題 発達に支援が必要な子どもたちとのポジティブな経験の重要性　～保育施設・療育施設へのアンケート調査をもとに～
３．学会等名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）一般発表
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 本原琴美、田中真介
２．発表標題 思春期における「自己信頼性」と「社会的交流性」の発達連関　～自己理解と精神的健康度の関連性をもとに～
３．学会等名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）一般発表
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 田中真介、横井川美佳、本原琴美
２．発表標題 自己信頼性と社会的交流性の発達をとらえた保育・療育　～自画像描画と対図形画の事例検討をもとに～
３．学会等名 日本応用心理学会第88回大会（2022年9月）一般発表
４．発表年 2022年～2023年

１．発表者名 田中真介
２．発表標題 自閉症児の心の発達　―自己信頼性と社会的交流性の発達と保育・療育―
３．学会等名 令和3年度 筑波大学公開講座「自閉症児の心の発達を学ぶ　―発達診断学の知見と実践を通して―」（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計5件

1．著者名 田中真介・乳幼児保育研究会	4．発行年 2024年
2．出版社 ぎょうせい	5．総ページ数 196
3．書名 続・発達がわかれば子どもが見える（第12版）	

1．著者名 田中真介・乳幼児保育研究会	4．発行年 2023年
2．出版社 ぎょうせい	5．総ページ数 178
3．書名 発達がわかれば子どもが見える＋（第44版）	

1．著者名 加藤純二・古賀真子・山本英彦・田中真介	4．発行年 2022年
2．出版社 コンシューマネット・ジャパン	5．総ページ数 114
3．書名 新型コロナワクチン（増補版）	

1．著者名 田中真介（編集）	4．発行年 2022年
2．出版社 福村出版	5．総ページ数 52
3．書名 日本応用心理学会編『応用心理学ハンドブック』第5章「発達と応用心理学」	

１．著者名 田中真介・母里啓子・山本英彦・古賀真子	４．発行年 2021年
２．出版社 コンシューマネット・ジャパン	５．総ページ数 92
３．書名 新型コロナワクチン　～知っておきたい副作用と救済制度のこと～	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	横井川　美佳 (YOKOIGAWA Mika)		
研究協力者	本原　琴美 (MOTOHARA Kotomi)		
研究協力者	塚田　直也 (TSUKADA Naoya)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関